



ないんだと。それを社長から常に聞かされるわけだから、結果、社員はみなお客さんにどう喜んでもらおうかということばかりを考えているのだ、と。

実際、目の前で青木さん夫妻がため息混じりに語り続けるHOPの美談は、出来すぎではないかというほどの感謝と感激に溢れるものだった。HOPが、ここまで顧客を心酔させられる企業だったとは。

お客さんに本物の感動を味わってもらうためには、言葉で要求されるされないに関わらず、そのお客さんを人としてまろりと理解し、気持ちを汲む感性と、それを期待以上の形に落とし込む技術、そしてセンスがなけ

ればならない。「もう贅沢なことばかり言っちゃったんですよね。ドアも普通のドアにしないでください、とか、取っ手に何か仕掛けを作ってください、とか。いろいろ見せていただいた

ら、なまじ知識が出来てしまっただもので(笑)。でも、いつも良い意味で裏切られるんです。家中のいろいろなところに立って眺めてみると、空間の取り方もさすがだなーって思うんですよ



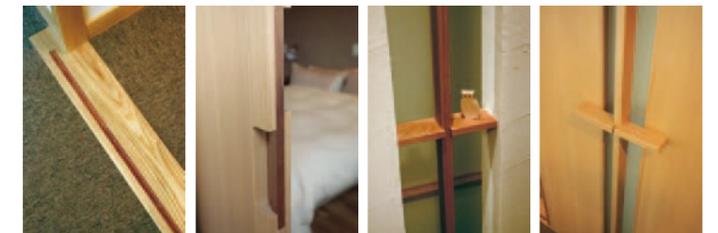
二階の寝室。なんとリビングの吹き抜け越しの窓から森を眺められるような設計に！ 枕の高さも緻密に設計されたそう。奥の戸から進める吹き抜け上の小スペースも、茂さんのお気に入り。

ね。葎入りの漆喰が、照明に映し出されたときのすぐくやわらかい雰囲気ですとか。まるで、実際に家族と寛いでいる今の姿を、細かな表情まで含めて設計士には予見されてしまっていたのではないだろうか、と2人は笑う。

石出社長の講演を聞く機会もあり、その価値観にも十分共鳴していたという青木さん。ゆえに、他の工務店と比較して迷う、などということは一切なかったようだ。「なんだろう。もっとみなさんに同じように幸せな気持ちになって欲しいなって思う。石出社長もよくおっしゃってますけど、古くなることは深くなることだって。古さを楽しめる家というのを、ぜひじかに味わって欲しいなと、ほんとにそう思うばかりですね」。

北海道の木を使った家作りや植樹の取り組みも、もちろん特筆すべきものがある。しかしそれ以前の、顧客に感動レベルの満足を提供するというプロの姿勢が貫かれてこそ、全ての要素が永続性という螺旋の上に並ぶことになるのだと思う。夫妻の無垢な笑顔は、そんなことを教えてくれた。

神は細部に宿るといいますが、青木さんが特に感銘を受けていたのは、一見気づかないような、細かい部分への粋な装飾。写真左から、木の埋め込まれたドアレール、ウォールナットの埋め込まれた取っ手、さりげなく統一デザインの階段の壁と地下室のドア。



リビング下の地下室は、グランドピアノの置かれた音楽スペース。奈緒さんの演奏に、茂さん聞き惚れる、の図。



3 1



4 2

1. 地下室への階段と、二階への階段が重なりあう所。奥からリビングの光が射すので常に明るい。 2. 玄関へと進むエントランスは、京都散策がお好きな青木さんたっての希望。家と外の間に、心をリセットする緩衝地帯が欲しかったそう。 3. 入口の戸を開けると最初に迎えてくれるのは、夫婦の木と称される桂を植えた坪庭。右の窓が、実は和室に…。 4. 和室の内部からは坪庭がこのように！ 入ってきたときは人を出迎える木であり、家の中では二人の安らぎの木になれば、と青木さん。「ここ(HOP)は、とにかく和室が一番こだわっていたなという印象がありますね。設計段階でもそうですし、大工さんも。ここが一番時間をかけていたように思います。すごく自信を感じましたね」。藤田工務店の宮大工に師事した時代から、石出社長の譲れないこだわりは和室にあるのだ。

